

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊 38 年目 **Nr. 426**

2025年10月号



Marianne Stokes Melisande, um 1895 87 × 52 cm, Tempera auf Leinwand Wallraf-Richartz-Museum & Fondation Corboud, Köln

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

159

東京科学大学(旧東京工業大学)ゼロカーボンエネルギー研究所では、原子力教育・研究に携わる国内一八大学を連携させた連合体(大学連合)を形成し、文部科学省の補助金を得て、国際原子力機関への学生派遣を中心とした人材育成事業を代表校として展開している(前号参照)。この事業の目的は、優れた国際感覚、高いコミュニケーション能力や情報発信能力を有し、国際社会で活躍できる原子力国際人材を育成することであり、そのため、国際原子力機関(IAEA)、経済協力開発機構/原子力機関(OECD/NEA)や海外大学に日本人学生を派遣している。

二〇一三年度から二〇二四年度までにIAEAへ一十九名、OECD/NEAに一名、海外の大学等に十九名の学生を派遣した。IAEAやOECD/NEAでは国際公務員と同等の仕事が派遣学生に要求されることから、原子力専攻の優秀な学生を選抜して三〜六ヶ月間派遣している。海外大学等へは、原子力工学に関心を持つ優秀な学生を選抜し、これまでにアジアや米国の大学等に二〜三週間短期派遣した。現地の学生との研究紹介やテーマを決めての討論を実施し、交流を図ってきた。



IAEAに派遣された学生たち

支援、関連ウェブの作成、加盟国へのアンケート調査の設計・作成、実施支援、関連実験の計画・実施・解析など多岐にわたる。

最近の国際機関派遣者の帰国後の報告では、「今後の研究に大変役立つ知識を得た。職場コミュニケーションや異文化理解、協調性の重要性を改めて学んだ。」「上司も納得する成果に達成感と喜びを感じた。よい環境で感じたことや学んだことを今後の研究や就職後に活かしたい。」「世界の研究者との交流により国際的な視点を得る機会となった。研修で得た知識や経験を今後の研究に活かしていきたい。」「努力を褒めてもらえたことで、グローバルに活躍できるという自信を得て、今後もグローバル環境に挑戦してみようと思えた。」「専門的知識を得ることができた。多様な人々と交流できた。今後の研究や仕事等に活用できる多くのことを学んだ。」「人間関係や生活を一から構築したこと、今まで認識していなかった自分の強み・弱みと向き合うことが出来た。」「一定期間自由で特定の課題に取り組めたことはとても楽しかった。大学での研究を別視点から考えるきっかけになった。」「様々な人と出会い、様々なことを学べたことがよかった。多く人と話し合えたことで自分がやりたいことが明確になった。」等の感想があり、海外派遣経験で得られたものは極めて大きいことが分かる。

海外派遣経験者の卒業後の進路では、博士課程への進学、国内の原子力関係の研究、電力、メーカーへの就職等で現在活躍中であり、IAEAを含め海外との関係のある業務を選択した者も少なくない。中には若くして市長を二期務めた後、最近の参議院選に立候補した異色の経験者もいる。ウクライナ戦争を契機として、わが国のエネルギー安全保障の脆弱性を背景に、原子力人材育成の重要性が強く認識されていることから、本事業の充実・強化に努めて行きたい。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の十月のイベントを紹介したい。秋は両市にとっても文化の季節であり、伝統や歴史を街に刻む行事が、空気を澄ませ、時間を深く感じさせる。ウィーンの国際映画祭と京都の時代祭は、まさにその季節性と文化性を象徴するものである。ウィーン国際映画祭は、一九六〇年に始まり、ドイツ語圏で最も歴史の長い映画祭として知られている。毎年およそ十万人の観客が訪れ、世界各地の新作映画やドキュメンタリー、実験映画など、多岐にわたるジャンルの作品が上映される。上映は市内の由緒ある映画館が中心で、公式プログラム以外にも特別上映やトークイベントが加わることで、映画芸術の現在を体感できる場となる。ハプスブルク

テーマとしては、国際会議の準備・実施・報告書作成の支援、データベースの設計・作成・運用支援、研究開発報告書の作成

帝国時代から音楽や美術を重視してきたウィーンが、二十世紀以降、映像芸術をその文化複合体の一部として取り込み、国際的な文化都市としての地位を保ち続けている証左である。市民も観光客も、映画館の外で夜風を受けながら上映を待つひとときに、この都市の多様性と開放性が感じられる。

一方、京都の時代祭は、明治二八年(一八九五年)に平安遷都一〇〇年を記念して創始された。歴史絵巻を再現する行列は、延暦時代から明治時代までの衣装や様式をまとった市民約二千人が馬や牛車などを含み、京都御所から平安神宮までの道を三時間ほどかけて練り歩く。行列そのものの伝統性に加えて、沿道には席が設けられ、有料観覧席では七千人を超える席の販売がなされることもあり、また令和元年には観覧者数約四万四千人が報告されている。地元民ばかりでなく国内外から多くの観光客が訪れ、古都京都の歴史と時間の重みを肌で感じることが出来る行事である。形は近代以降の創始とはいえ、その目的は古都の歴史を復元し継承することであり、京都のアイデンティティを映す鏡である。

このように、ウィーン国際映画祭は「現代芸術を世界と結ぶ開かれた窓」であり、京都の時代祭は「過去の歴史を人々の心に蘇らせる場」である。時も所も異なるが、両市の市民と訪問者が文化を共有し、季節の深まりを刻むという点で共通している。秋の光と影のなかで、映像と行列がそれぞれの都市の歴史を鮮やかに浮かび上がらせている。余談であるが、筆者は二〇一一年〜二〇一六年まで大学

連合の京大での窓口を務め、京大の学生を二名IAEAに派遣して頂いた。本年四月より大学連合事務局を担当することになり、現在三名の学生を選抜し派遣手続きを進めている。ウィーン国際映画祭は残念ながら観る機会はないが、動く歴史風俗絵巻である時代祭に感動した。今



月も両市の十月のイベントを紹介することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン国際映画祭の写真を掲載させていただきます。

■ 杉本純 東京科学大学特任教授
元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長



© GEKKAN-WIEN 杉本純 監督 Viennale 2021

